

医療ルネサンス No5361

シリーズ
こころ

命に寄り添う

④ / 5



在宅介護が増える中、公的な介護保険制度ではなく、民間団体の支援で救われる人もいる。

昨年11月に95歳の父を看取った一人娘のB子さん(62)もその一人だ。Bさんは東京に生まれ、両親と暮らしていた。最愛の母とは対照的に、父

との関係は長い間うまくいかなかった。「相性が合わず、私は父を冷たく拒絶していた」と振り返る。

Bさんは、病弱な母の介護を自宅で一人で行っていたが、心身の調子を崩し、倒れてしまった。代わりに父が母の介護を引き受けてくれたが、今度は父が倒れた。当時88歳だった。介護相談員に相談し、両親は別々の病院に入院した。

経験もあり、介護保険など既存の福祉制度だけに頼る気にもなれなかった。そこで支援を受けるようになったのが、生活自立の支援や相談を行う会員制のNPO法人「マイウェイ協会」(東京)だ。

2009年、Bさんは、93歳になった父に静岡県熱海市にある同協会の保養所に移ってもらった。一般客も病気の人も泊まれる。海や山も見渡せる好立地。病院と違い、宿泊者は自由に時間を過ごせる。地元の開業医による訪問診療や、自分が選んだヘルパーも頼める。体力がないB子さんでも、好きな時に来て泊まり、父の様子を見守ることができた。

10年11月、Bさんは父を看取るために施設に住み込んだ。父は全身の衰弱が進み、言葉数は少ない。最初は2人の間のわだかまりが消えず、視線を合わそうとしなかったが、次第に目と目で会話ができるようになった。

2人で住んで1年が過ぎた昨年11月のある夜。B子さんが「おやすみ」と声をかけると、父は「一人になっても大丈夫か」と聞いてくれた。自分を案じてくれたその言葉に、父の深い愛情を感じた。翌朝、父はほほ笑みながら旅立った。

母は間もなく病院で亡くなった。父は退院したが、体力が急に衰えた。しかしBさんは体調が悪く、父を介護できる状態ではなかった。母親の介護中にヘルパーとの人間関係に疲れた

しかし、父は脳梗塞を起こし、口から食べる力も衰えて体力も低下した。同協会のカウンセラー、安達文子さんは「2人の絆を取り

B子さんは「快適な環境の中、父と2人だけの時間を作ってもらったおかげで、最期にやっと心が通じ合えた」と感謝している。

くらし 家庭